

守
破
対談
創

『孫の力』(中公新書)が話題を呼んでいる。自分の孫の観察という「誰もやったことがない」方法で、人の心の成長過程を見事に解明しているからだ。著者の島泰三氏は知る人ぞ知る霊長類学者。自身も孫を持つ野田審議委員は「サルは人間の鏡だ」との言葉に共鳴する。ニホンザルの研究からアイアイの保護活動、孫との関係にまで話が弾む。

自分を認めてくれる大人の目が 子供の個性を引き出す

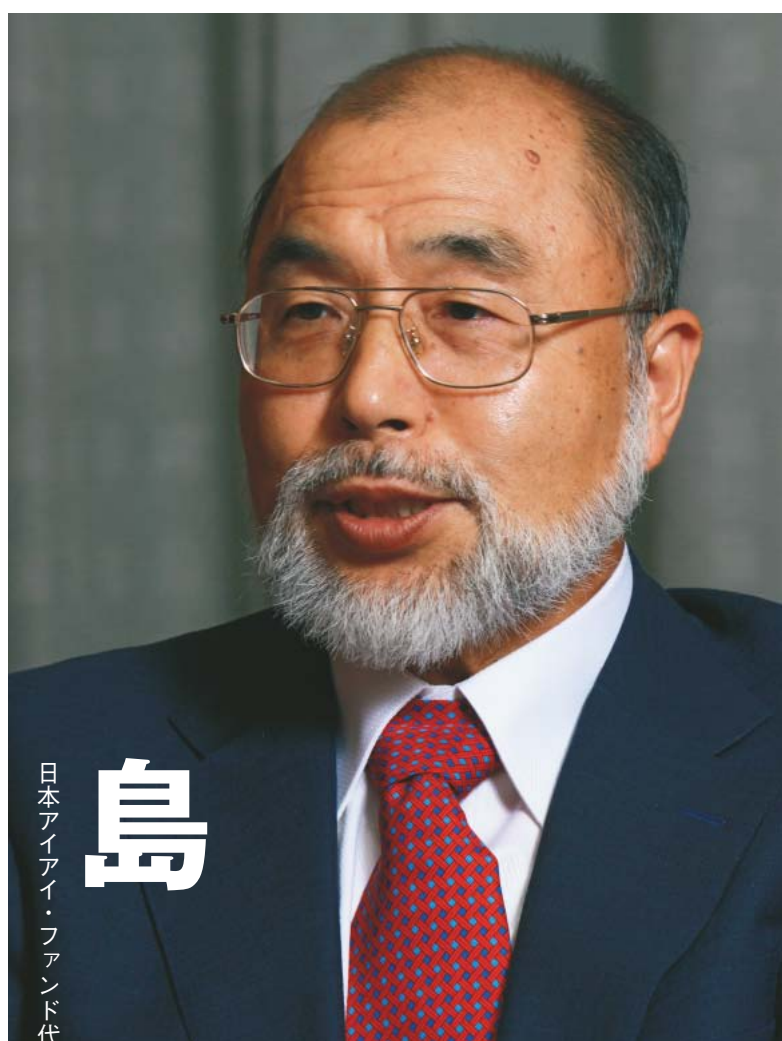


野田忠男

日本銀行政策委員会審議委員

Tadao Noda

[のだ・ただお] 1947年山口県生まれ。1969年京都大学法学部卒業後、第一銀行入行。1996年第一勧業銀行法人企画部長、1997年取締役法人企画部長、取締役業務運営企画統括室長、1998年常務取締役、2000年みずほホールディングス常務執行役員資産運用信託ビジネスユニット長、2001年常務執行役員企画グループ長、2002年代表取締役副社長、2003年みずほフィナンシャルグループ代表取締役副社長、清和興業常勤監査役、2005年中央不動産代表取締役会長、2006年日本銀行政策委員会審議委員。



島泰三

日本アイアイ・ファンド代表

Taizo Shima

[しま・たいぞう] 1946年山口県生まれ。東京大学理学部人類学科、同大学院卒業後、1978年(財)日本野生生物研究センターを設立し、ニホンザルなど野生動物の研究を行う。房総自然博物館館長、雑誌『にほんざる』編集長、天然記念物ニホンザルの生息地保護管理調査団(高宕山、臥牛山)主任調査員、国際協力事業団マダガスカル国派遣専門家(霊長類学指導)などを務める。現在、NGO日本アイアイ・ファンド代表。マダガスカル国第5等勲位シュバリエ受勲。著書は『サルの社会とヒトの社会』『はだかの起源』『孫の力』など多数。

サルは人間の鏡だ

野田 島先輩、お久しぶりです。やぶから棒ですが、最近下関にお帰りになったとか。

島 ええ、つい先日。今取り掛かっている著作の調べ事がありまして。われわれの母校である（山口県立下関）西高にも立ち寄って図書館に私の全著書を寄贈してきました。

野田 そうでしたか。ところで、島さんは、霊長類学者ですが、霊長類学者と人類学者は同義と考えていいのですか。

島 広義ではそうですが、学問領域としては完全に別ですね。私は自然人類学からこの世界に入りました。これは人の自然史という生物学の一つというべき分野です。しかし、現在の人を調査しても、どんな働きもすべてお金に換算されてしまい、研究しても全く面白くありません。そこで、その一歩先にあるサル学に興味を持ちました。

野田 お金はあくまで人の後について来るものだと思いますが、今は逆なんですね。お金が世の中の主役になっていることに私も疑問を感じます。

島 サルの活動をみると、一つ一つの行動が独自で面白かったんです。当時、私の先生であるサル学者の西田利貞先生の「餌付け^{えづけ}されていない野生のサルの研究者は君が初めてだ」という口車に乗せられ、結局房総半島の山の中に二三年間居着いてしまいました。

野田 サルの社会と人の社会の類似性は何ですか。島さんが「孫の力」を見いだされたヒントがそこにあるような気がしているのですが。

島 やはり親と子の関係やお互いの優しい関係ですね。喧嘩^{けんか}などの闘争的関係やライバルのような拮抗^{きっこう}的關係などもあります。親が子を見守る姿や遊ぶ際の子供同士の関係は、ほかの動物よりも複雑なものがあると思います。

野田 「サルは人間の鏡だ」ということをおっしゃっていますね。

島 そうです。象やライオンは姿形があまりに偉大で尊敬心しか湧かず、自分に置き換えられません。サルなら自分に引きつけて考えることができるからです。

アイアイの研究

野田 島さんは、マダガスカル島

固有種のアイアイというサルをご研究されていますが、房総半島のニホンザルから研究対象が変わったきっかけは何だったのですか。

島 私の映像癖でしょうね。研究者は、普通、動物の行動をフィールドノートに時間を追って記録します。しかし、それでは記録し切れないものがあるのです。動物の行動では、ちよつとしたことが全く違う意味を持つことがあります。これは、人間の目ではとらえきれません。そのため、私は可能な限り、映像で動物の行動を記録しようとしています。

野田 最初は何から始めたのですか。やはりニホンザルですか。

島 発端は一九七四年の屋久島行きでした。屋久島の自然の中で生きているニホンザルを表現するとして、映像しかないと思ったからです。その準備をしていたらイリオモテヤマネコの研究者から誘われて、世界初のイリオモテヤマネコの撮影に成功したことで病みつきになりました。一九七八年には、財団法人日本野生生物研究センターを設立し、動物の記録映像の制作を本格的に立ち上げました。ちょうどそのころ、民放のテレビ番組に協力することになりました。当時のテレビ業界には勢

いがありましたから、BBCもナショナル・ジオグラフィックも撮っていない映像を撮ろうということで、世界三大珍獣のアイアイを撮影することになったのです。それで、撮影隊を率いて一九八三年にマダガスカルに向かいました。

野田 アイアイは「アイアイ、アイアイ、お猿さんだよ」という童謡もあるので、もっと早くから知られていたかと思っていました。本格的に現地に定住してアイアイを研究しようと思われたのは、いつごろですか。

嵐の中のサル観察の成果

島 一九八八年からです。当時、ニホンザルの博士論文を書くこととしていました。従来の研究では、嵐の夜にサルたちは洞窟^{どうくつ}などで嵐を避けるとされてきました。私はこれに疑問を持ち、ちよつど房総半島を台風が直撃した日に、嵐の中のサルの行動を調べに行きました。木の上に登って観察していると、まるで船に乗っているように揺れました。これはサルも大変だと思つて見ると、サルはキャッキヤツといって遊んでいるだけです。これだと思いました。嵐でもサルの動きは変わらない。でも、

「変わらない」という結論では論文になりません。博士論文としては完全な失敗です。

保護区管理の ファンド結成

島 西田先生に相談すると、世界初や新発見なら論文になると言われました。そこで「では、アイアイをやります」となったのです。アイアイのすむマダガスカル^{マダガスカル}の凄^{すご}いところは、一九八六年に新種が発見されたことです。サルの新種発見など誰も予想していませんでした。ところが、それからは新種発見のラッシュです。かつては一九種と言われていたマダガスカル^{マダガスカル}のサルの種類が、今では一〇六種（絶滅種一六種を含む）にもなっています。

二〇〇〇年から現地調査をし、その報告をマダガスカル政府に提出したことで保護区ができました。ただ政府には管理するためのお金がない。そこで作ったのが日本アイアイ・ファンドです。

野田 自然保護を目的としたファンドですね。

島 一万四〇〇〇ヘクタールの林とそこにいる動物を守る仕事です。かつてはマダガスカルは全土が大森

林に覆われていましたが、今は一割前後しか残っていません。三〇〇キロ以上もあるサルなど一六種が既に絶滅しています。

生後二カ月目の ほほ笑みの衝撃

野田 お孫さんの観察をお始めになったきっかけとサル学との関係ですが……。

島 先程の台風の中で観察結果は、台風をものともせずにサルが遊んでいられるのは実は雨をはじき寒さを防ぐ毛皮のおかげだということです。しかし、人間には毛皮はありません。人類進化のどの時点でそれがなくなったのかを調べた研究者はおりません。そこで「はだかの起源」を研究することにしました。

野田 ダーウィンはどう言っているのですか。

島 ダーウィンは「The Descent of Man」という「自然淘汰^{自然淘汰}」のほかに「性淘汰」を提唱した本の最後の方に二カ所だけその点に触れていますが、あまり参考にはなりません。この問題については、私が二〇〇四年に出した『はだかの起原——不適者は生きのびる』（木楽舎）で詳しく述べています。簡単にまと

めれば、人間の皮膚が裸なのは生存に不適であり自然淘汰では説明できないので、ダーウィンは第二次性徴であり、両性間で形質の特性を選択する性淘汰で説明できると考えたのです。しかし、それでは説明不十分なので、「これまでに述べた考え方は、科学的な正確さに欠けている」と認めています。そこで、私は自分で人間が裸になった年代を特定する作業に着手したわけですが、そのときに、孫が生まれたのです。

生後二カ月目の孫娘は、完ぺきに無力、しかも裸。

野田 ほかの動物と違い、裸のままだでは生きていきません。

島 最初から守られることが前提になっています。では、なぜ人間はこれを守ろうという気持ちになるのかという疑問を持ちました。しかし、生後二カ月目の孫のほほ笑みを見た瞬間に、人類を救ったのはこのほほ笑みだったのだと気付いたのです。

このほほ笑みは、人間の親や近親者に特別の感情を呼び起こさせますが、ほかの動物にはないものです。

野田 日本人は日常生活でよくほほ笑むことがあります。これとは違うのです。

島 ラフカディオ・ハーンは、日本

人の一番大きな文化的な遺産はほほ笑みであると述べています。これはお地藏様のほほ笑みだというのです。日本人のほほ笑みの意味や、心に特別の感情を呼び起こすというほほ笑みの決定的に重要な意味に気付かせてくれたのは、ラフカディオ・ハーンでした。彼は、そのお地藏様こそは、日本人だけが生み出し得た子供を守るための神様であり、「無限の愛の深さと崇高な慈悲」を体現していると言っているのです。

恐怖克服の 現場に立ち会う

野田 孫のほほ笑みだけでそこまですみ取れるのは、サルを観察してきたという経験があるからでしょうね。私は、毎日、朝会社に向かい深夜に帰るという生活でしたので、自分の子供の心がどういうプロセスで成長していったか、この本を読んで初めて分かった気がします。お孫さんを六年間観察されて、最も感動的だったことは何ですか。

島 やはりほほ笑みの力です。ほほ笑みによって、周りの人にもほほ笑みがどんどん広がっていくことです。また、最初と二番目の孫でほほ笑みの印象が違うのも驚きでした。



最初の孫のほほ笑みは、闇に明かりが灯るように見ている者の心にゆっくりと光を広げるものでした。二番目の子のほほ笑みは大きな花が開くように、こちらの心を明るく色で満たしました。ほほ笑み一つにも生まれた時から個性があるのが人間なのだ、決して取り換えはきかないものだと思いました。もう一つは、人は、昨日の自分を超えようとする生き物なのだということです。本にも書きましたが、四歳の孫が恐怖を克服した日に会いました。孫が自分の内面を初めて見詰め、それまでの恐怖

をいかに克服していくのかが分かったのです。これが本当のことなのかさすがに自信がなく、友達のサル学者とメールを交換するなどして、何度も確認したほどでした。

子供の個性には周りの大人の温かい目が必要

野田 ほほ笑みや心の形成には、周囲とのコミュニケーションが重要だと思われまふ。

島 人間が不思議な生き物だと思つたのは、心がある生き物だからです。これだけ複雑な心がどうつくられていくのか。結局、心というのは心の通わせ合いの中でしかつくられないのではないかと思います。

本で紹介した子供時代の湯川秀樹とそのおじいさんとの関係のように、完全に自分を認めてくれている大人が周りにいて、自分に対して注いでくれる目があると、その子を持つている心の能力が全方向的に広がるのです。子供の個性を全面的に引き出すには、周りにいる大人の温かい目が必要なのです。ラフカディオ・ハーンの言うお地蔵様のほほ笑みとは、実はこのことだったのではないかなと思います。

野田 周りの大人の対応で、子供

の心の形成が変わってくるというのは納得できます。

島 人の子の心と大木になる木の苗は、その姿が似ているなあ、と思つたことがあります。孫が四歳になったときに、恐怖を自分で克服する現場に立ち会つたわけですが、ちょうどその年に木の苗に枝が伸び出しました。ああ、これで一つの芽が折れても、別の芽が大きく育つのだと安心したことがあります。人の子の心も、四歳にもなると、折れたきりにならない保障を自分で作るのだらうと、思つたのです。

遊びを食べて子供は育つと書きましました。子供は遊ぶことで心を豊かにします。遊びは木が育つための大地のようなもの。太陽の光は、両親であり、祖父母や周りの大人はたまに降る雨のようなものでしょうか。

野田 なるほど。太陽の光だけでは木は育たないと。

島 そうです。ただ違うのは、人間の場合は、人と人との心の通わせ合ひという全く無形のもので心が育つことです。

祖父たる覚悟と訓練

野田 本の中で、「単に若者に未来

を託すと言つてしまふと無責任と思われるほど世界は厳しい」とあります。私も孫を持ちまして、その気持ちがよく分かります。世界一厳しいこの国の財政を持続可能なものとするなど、本当に安心できる国というものをどうやって復活させ次世代に引き継いでいくのか、これはわれわれ世代にとって重要な仕事だとあらためて肝に銘じました。

島 世の中を変えていくのは次の世代です。その若い世代とうまく付き合うには、こつが必要でふ。それは祖父であるには覚悟と訓練が必要であることと似ています。その訓練の一つがほほ笑みです。小さい子を見るとにつこりとする。でも、しゃべつちやいけない。孫が何をどうしようが、ただにつこりと笑つていく。孫との関係は初恋よりもっと深いものがあります。孫が大きくなれば、祖父母の手が届かない世界に飛び立ってしまいます。その痛切な思いを平然と笑つて受け流すためには覚悟が要るのです。

野田 確かに、若い世代を見守るだけに徹するには訓練が必要ですね。今日は本当にありがとうございます。